

## 「田宮流神剣放光会講習会（春期）」



令和5年5月14日松田体育館にて田宮流講習会が行われ我々神明会も5名が参加いたしました。午前中は田宮流の組太刀（相手を付けて寸止めで打ち合う稽古）太刀態の講習で技の解説と実技を学びました。詳細が丁寧に解説されたプリントも頂きました！太刀態は剣術的要素が有り、居合では敵の右腕など斬り付ける型ですが、太刀態では、敵の刀に抜き付け刀が接触した際に粘るように押さえつける手の内を使うなど、動作は同じ様に見えても、接触時の手の内が・・・何度も稽古を繰り返し手の内を体得せねば・・・1～4本目までこの粘りを掛ける（貼り止め）が有り、体得するのは難しいと思いました。確かに刀を弾いたりすれば、敵は弾かれた反作用を使い反撃の太刀が思わぬ方向から返って来そうですし、表の巻き3本目は自分が反作用を使い反撃する抜き打ちですし・・・観ているのと実際身につくのは大違いですね！



そういえば、始めた頃の私は柄の握り方もゆるゆるで、茶巾絞りが出来ずに手の内を締めるタイミングもマチマチで、掌や指の関節にタコが出来たり、握り込み過ぎたりして柄糸が擦り切れて柄ごと交換しました。柄の交換は25,000円でした！10年程してから腱鞘炎もタコも出来なくなったので、やっと手の内が身についたのかな？と言う感じです。

特に7本目の型は1～6本を身につけてからでないと絶妙な武器同士の接触戦を制する型なので、今の私の腕前では「日くれて道遠し」です。現在の太刀態、中太刀7本は、田宮流窪田派立合伝 抜掛4本/抜拂（ぬきはなち）3本、脇差の型3本は、小刀伝 打切/切返/切込としてあった技らしいのですが、今我々が学べるのはこの計10本しか無く、他にあった技は伝わっていないので惜しいですが、残された技を大切にしていきたいですね。脇差の型にも貼り止めがありますが、まずは先の7本の理合いを理解してからと思っています。講習で拝見しました太刀態ですが、教本では、袴の股立ち（「モモダチ」袴の裾を持ち上げて、足回りが動き易くする袴の付け方）を取り、刃引きの真剣でと有りますので、安全を帰して木刀で行われている事と、脇差の型の最後の止めは寸止めでしたが、やはり安全を帰して、受太刀の防御で終わっていましたので、参加されなかった会員様には、この太刀態の10本の動画をご希望があればコピーしてお渡し致します。広報部までお気軽にご連絡くださいませ。（まずは表の巻き11本を身につけて、太刀態に行かないと理解が難しいですが）



午後からは型稽古を中心に行い各技のポイントなどを設対者を置いて、分かりやすく解説して頂きました。秋には神明会の新しく入門して頂いた会員さん達と共に参加出来たらと思いますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。また参加頂く会員さんも会場が広く本部の方々も人数が限られていますので、終了後は掃除や机、椅子などの跡片付けも率先して行って頂ければ幸いです。



◀この写真は、私が最初に購入した居合刀で、力任せに振り過ぎ（今もですが）手の内がクルクルなどにより、鍔元付近から折れてしまいました。2本目の居合刀は柄巻き糸が切れてしまい・・・皆様も力の入れ過ぎにはご注意ください！腱鞘炎も漏れなく付いて来ます！後稽古の前には、目釘がグラグラしていると危ないので、先輩に聞いて刀の整備を心掛けましょう！